

(2) 最終学歴から見た教員構成では、高校、旧制中学校、国立大学教員養成 2 年課程、短期大学の占める比率は相馬の 24.7% が最も低く、次いで双葉、西白河、信夫、北会津、と続き石川 48.8、東白川 49.4、南会津 53.1% となっている。

e. 出張所単位の教科別の教員構成

出張所単位の教科別の望ましい教員構成との間によく均衡のとれているのは両沼、次いで石城、田村、伊達となり、均衡を欠いているものには石川、南会津、安達などがある。然し、出張所単位の均衡状況がそのまま個々の学校での均衡を示すものではない。個々の学校の均衡状況から見ると、信夫、伊達、岩瀬、北会津、相馬などはよく、悪い方では両沼、次いで東白川、南会津、田村、西白河、石城と順次好転している。

f. 高校への志願、進学、学力検査の成績との関係

(1) 現状では、一応志願がその限界に達していると思われる地域は、伊達、西白河、石川の各出張所管内。

(2) 高校への進学が比較的容易で、ために志願率も高かまっていると見られる地域は、安積、耶麻、双葉、相馬の各出張所管内。

(3) 高校への進学が困難で、ために高校への志願率が低くなっていると見られる地域は、信夫、安達、北会津、両沼、石城などの各出張所管内となっている。

E 診断的性格を帯びた福島県で標準化した学力検査問題

a. 学力検査問題の作成とその標準化

3 カ年計画の第 3 年度にあたる本年度は、小学校の第 1・2 学年、中学校の第 3 学年の国語、算数・数学の問題を作成し、これをもって小・中学校の二教科の問題は完成した。学年はじめではレネステストとして個々の学力を診断し、指導計画作成のために、年度末では指導の反省、あるいは学級・学校の学力の位置づけのためにこのテストを用いることができる。

問題作成では、例年と同じ考え方と作成の過程を経て第 1 回の作成委員会を開き、次いで小・中学校の各学年の性格から考えテスト期日をずらしたので、第 2 回の委員会に中学校の問題を、第 3 回委員会で小学校の問題を最終的に検討した。

標準化のための標本の決定にあたっては、中学校は標本校 55、生徒数 1,900 を目標として、進学志願率と学校規模による層別を行い、これに比例割当法によって標本数を定め、標本生徒の決定には二段抽出法を用いた。なお、各出張所管内に各層の標本校が選定されるような考慮を払った。小学校は児童管理を考慮して標本児童を学校単位にしたため、標本校 25、児童数 2,000 を目標として学校規模による層別を行い、比例割当法をとった。

学力検査は、中学校が 1 月 20 日に、小学校は児童管理のうえから国語、算数を前半と後半にわけて 3 月 10・11 日に、各出張所の指導担当者および研究所員がテスターとして全般の管理運営にあたり、各学校のテスト補助員

によって直接テストを実施した。

テストに表れた各小問の正答率、標準化した換算 T スコアは「学力検査の手引」で示したとおりである。

b. 誤答分析を通してみた指導のあり方

昭和 33 年度の標準化のために実施した小 3・4、中 2 の学力検査問題の答案から、系統的抽出法によって各学年約 400 を抽出し、その反応分析を行った。誤答は各小問ごとに調査して誤答傾向に従って類型化し、誤答の要因を作問の観点と対応させて児童生徒に対する望ましい学習指導のあり方を考察したものである。

県下全域にわたる多数の答案から得た結果として、本県の子どもへの陥りやすい共通の問題点である。子どもにおかれている教育条件が急変するものでなければ、このつまずきは少なくとも数年は続くと考えられる。そうであるなら、来年、再来年の子どもに対して、今からその点を考慮した学習指導を行うことはよい結果をもたらすに違いない。鋭密にはこの考察の検証を必要とするが、これは昭和 35 年度にゆずり、本年度は上記の考察の結果をとりあえず次の要領で公にして現場での活用に供することにした。

○国語について

“標準学力検査問題の報告書—その 4—国語学習の診断と指導”にまとめて発表したが、その意図するものは次のとおりである。

各学年の学力検査問題の領域—文字力・語彙・語法・読解—に従って、①どこにどんなつまずきがあるか。②そのつまずきの要因。③その障害を除くための指導をどうするか、について考察し、今後の指導で重点的に取扱うべき事項を各学年の各領域の終りでまとめた。一応、各学年別にまとめてあるが、昨年度の報告書(小 5・6、中 1)との関連を持たせ、各領域ごとに学習の系統化を図っているの、領域ごとに学年を通して読むのがいっそう効果的である。

とくに、全国水準より極端に低い「読解」については一つ一つを分析する力と、それらを構造的に考え、総合して文章の要旨や主題を読みとる力とを考察した。この二つの方向を持つさまざまな能力が読解にどんな問題をなげかけているかを明らかにして、その指導法の確立を期した。その他、各領域毎に指導上の参考としてまとめているので、くわしくは上記の報告書を参照されたい。

○算数・数学について

“標記学力検査問題の報告書—その一—算数・数学学習の診断と治療”において詳細に述べてあるので参照されたい。その内容の概略は次のとおりである。

各学年の学力検査問題の領域—小 3・4 は数の概念、計算、計量、図形、数量関係、問題解決、中 2 は数と計算、式と文学、方程式、図形、数量関係、問題解決—に従って小問ごとに正答、誤答、無答の率をあげ、誤答例とその反応率を具体的に提示して、①つまずきの原因。②取るべき処置を述べて、更に③領域全般としての特に目立つ欠陥、指導上の留意点と、④学年全般の問題